階層意識と親密な関係性の構築
―現代中国の青年層による生活実践における差異性の理解―

李　相君（新潟大学）

中国社会は転換期以降、社会構造、市場制度、文化的価値観といった様々な次元において継続的に変容を遂げてきた。その中で、家族およびジェンダー領域においては、近年顕著な変化が見られている。結婚および家族は、親密関係をめぐる研究の中心的な主題であり、配偶者選択パターンに関する分析においては、社会階層の視点から説得力のある説明が提示されてきた。とりわけ、社会経済的地位に着目したアプローチでは、同質婚や上昇婚といった理論的枠組みが形成されている（白波瀬 1999；李・陸 2008）。現代中国社会においては、「金銭がなければ恋愛は成立しない」といった通俗的な言説が日常的に流行している。しかし、そのように断言する個人であっても、「どれほどの経済力があれば恋愛や結婚が可能となるのか」という問いに対して、具体的な基準を提示することは難しい。山田（2016）は、「結婚の壁」、すなわち人々が結婚に至らない要因について分析し、この壁を乗り越える可能性を、「合理的要素」と「非合理的要素」の二側面から検討している。また、李培林（2005）は、伝統的な社会階層研究の枠組みが、客観的階層と主観的階層のあいだに存在する実質的な論理的関係を十分に明示できていないと批判する。二者の議論を結びつけると、主観的階層意識は、個人の行動を方向づけるばかりでなく、親密関係の構築にも決定的な影響を及ぼす要因であると考えられる。

本研究は、解釈主義的パラダイムを基盤としつつ、実証主義的視点を補助的に導入した質的研究である。現代中国における青年層の親密関係の構築とその背景にある価値観を明らかにすることを目的とする。2023 年 7 月から 10 月、そして 2025 年 1 月から 3 月にかけて、発表者は北京と上海の両都市において、都市部に居住する 20 歳から 40 歳までの若年男女約 40 名を対象に、1 回あたり 2～4 時間に及ぶ半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は、主として親密関係に対する認識、個人の人生観に関する設問を中心に構成しており、なかでも階層アイデンティティを重要な分析軸の一つとして位置づけている。

結果として、主観的階層意識が親密関係の構築において一定の指向性を有することを明らかにした。主観的な階層意識は、客観的な階層属性を基盤として生成されるだけでなく、身近な他者との比較や組織内における地位経験といった主観的要素によっても形成されることが検証された。本研究において抽出された主観と客観の階層意識の乖離（主客観的階層ギャップ）は、個人が生活上の差異をいかに捉えているかを示す象徴的な指標と位置づけられ、親密関係の構築において重要な役割を果たすと考える。相対的剥奪感は、階層意識の乖離を説明する要因として重要な役割を果たすと同時に、個人の親密な関係性の構築にも影響を与えている。本研究は、親密関係における「非合理的要素」の意義を改めて強調するものである。婚姻に限らず、親密関係そのものもまた、感性的選択に基づく社会的行為として捉えられる。個人の非合理的な行動の背景や動機を把握することは、現代東アジア社会における親密性の変容を理解するうえで不可欠な視座である。

参考文献：
李培林（2005）「社会衝突与階級意識――当代中国社会矛盾研究」，『社会』25 巻 1 号 pp.7-27
李煜・陸新超（2008）「擇偶配對的同質性與變遷――自致性與先賦性的匹配」，『青年研究』6 号 pp.26-33
白波瀬佐和子（1999）「階級・階層、結婚とジェンダー――結婚に至る階層結合パターン―」，理論と方法，14 巻 1 号 pp. 5-18
山田昌弘（2016）「家族社会学，感情社会学の視点からのコメント」，理論と方法，31 巻 1 号 pp.94-98

（キーワード：階層意識、親密関係、相対的剥奪感）